



| | |
|------------------|---|
| Title | ペナコリのコタンとイウォロに関する現地調査に参加して（口はアイヌ語表記では小文字） |
| Author(s) | 川上, 倫子 |
| Citation | アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 10-11 |
| Issue Date | 2024-03-29 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/92881 |
| Type | report part |
| File Information | ronshu_biratori (7).pdf |



[Instructions for use](#)

ペナコリのコタンとイウォロに関する現地調査に参加して

川上倫子
株式会社平村建設

アイヌ語でイウォロという、伝統的な生活空間を指す言葉があります。そのイウォロに関して、ペナコリと呼ばれる集落とその周辺で調査を行いました。ペナコリは、アイヌ語で“川上の方へ向かう道の所”や“上流の方が高い”と解釈されている地名で、沙流川からの比高約 21 m の河岸段丘上に位置しており、集落は段丘面の微高地にあります。

ペナコリは、文化人類学者の泉靖一氏による「iwor」についての調査 [泉靖一：1952] に協力した古老の一人川上サノウク氏、その孫でありアイヌの方々の暮らしを記録した川上勇治氏、伝統的な暮らしや風景を記憶している川奈野一信氏や山岸俊紀氏（以下山岸氏と表記）が暮らしていた場所です。川上両氏に関わる文献資料と、川奈野一信氏と山岸氏の記憶に基づいてまとめられた吉本裕子氏の著書『エカシの記憶を展示する—昭和のアイヌの暮らし—』 [吉本裕子：2020] を参考に、山岸氏と、川奈野一信氏のご家族でありアイヌ文化の研究をされていた川奈野浩林氏の協力を得て現地調査を行いました。

イウォロは、隣の集落のイウォロとの間に杭を立てる等して各集落が使用権を所有していた生活空間と考えられています。このイウォロの中で、集落で暮らす人々の飲用水、食・衣類・生活民具や家の素材等の大部分を賄っていたと思われます。調査の中では、イウォロの中で、実際に資源調達をどういった場所でどのように行っていたか等の調査を行うことで、近代以降のイウォロの活用と暮らしについて探りました。

まず集落内です。写真 1 は昭和 14 年のペナコリの写真です。この頃はチセ（家）が赤線で示す道路の東（写真では右）にずらっと並んでいます。現在は過疎化が進み人口は減っていますが、写真 2 の通り、道路（赤線）の線形は変わらず、道路の東側に家が数軒並んでいます。萱野茂氏 [萱野茂：1973] によると道路を挟んで東側に家、西側にトイレや倉庫があるのが伝統的な集落の様子とされており、写真の辺りには今も道路の東側に家、西側にトイレや倉庫が残る家がありました。誤解の無いように念のため記載しますが、もちろん家屋内に水洗トイレ完備です。倉庫は残念ながら調査の後に解体されました。

山岸氏の案内で集落近くにある「ソラッキ（アイヌ語でソは滝、ラッキは澄む、穏やかな、静かなり）」と呼ばれる湧き水に出会いました（写真 3）。川上勇治氏 [川上勇治 (b)：1991] によると、ペナコリの集落はもともと沙流川に近い位置にあったのですが、飲用水と農地を求めて現在の地に移動したとされています。集落移転後のペナコリ住民は、井戸が整備されるまで沙流川支流のペナコリナイに流入するこのソラッキの水を飲用水として使用していました。ソラッキ付近はフキ等植物に覆われ、ゴミも散見されましたが、周囲を片付けると、今もきれいな水がこんこんと湧き出ていました。またソラッキから約 70 m 上流側には水量の豊富な湧水ポイントがあり、上水道が整備されるまでの間、生活用水として使用され、現在は地域の農家により農業用水として活用されています。

1 アイヌ語地名・名称には複数の解釈があり、ここでは『萱野茂のアイヌ語辞典』に依拠



写真1 昭和14年のペナコリ
(フォスコ・マライーニ撮影 [川上勇治 (a)])



図2 現在のペナコリ (2021.1.21 撮影)



写真3 ペナコリのソラッキ (2022.6.14 撮影)



写真4 ニカルシコツ (2021.1.21 撮影)

上記の他に山では建材・生活道具の素材となる樹木を入手し、薪を取り、山裾で山菜の収穫や炭焼きを行い、シカの通り道にシカを捕らえるための罠を仕掛ける場所があり、沙流川近くの沼では家の床に敷くトマ（敷物）の材料であるガマが育ち、時には衣類や運搬道具を作る木の皮を浸す等した事、さらに川の近くには畑があったこと等を山岸氏に教えていただきました。資源を採取できる場所には、例えば写真4の辺りが「ニカルシコツ（薪を取る窪み）」と名付けられたように活用方法を示す地名が付けられており、代々その地名を伝えることで継続的に活用してきたことがわかります。

現地調査を通して、イウォロを活用した暮らしは、山の稜線に囲まれたイウォロ内の地形やその土地の状況等による特性を活かし、資源を入手できる場所や時期を把握して、資源を持続的に活用し続ける知識を必要とするものだったことが体感できました。

参考文献

- 泉靖一 (1952) 「沙流アイヌの地縁集団における I WOR」『民俗学研究』
- 萱野茂 (1973) 「わが沙流川」『シシリムカのほとりに』日本観光文化研究所
- 萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂 (アイヌ語解釈)
- 川上勇治 (a) 『サル・ウン・クル物語』日本観光文化研究所 (背表紙)
- 川上勇治 (b) (1991) 『サルウンクル物語』すずさわ書店
- シシリムカアイヌ語地名研究会 (2014) 『シシリムカアイヌ語地名研究』
- 吉本裕子 (2020) 『エカシの記憶を展示する一昭和のアイヌの暮らし』共同文化社